

現在、小麦に赤かび病が多発生しています！

赤かび病は小麦をはじめとする麦類が感染する病気で、現在、小麦で多発生しています。赤かび病の感染拡大を抑えるため、1回しか防除していない場合は直ちに2回目の防除を、既に2回目の防除をしている場合は発生状況に応じて3回目の防除を行きましょう。

1. 赤かび病の特徴

(1) 概要

農産物検査規格では、赤かび病混入率の許容値が0.0%と厳しく設定されており、等級低下の要因となります。また、赤かび病菌が生み出すデオキシニバレノール（以下、DON）という「かび毒」は人体に有害であり、一定以上のDON濃度(1.0ppm以上)が検出されると出荷が不可能となります。

(2) 赤かび病の子のう胞子飛散好適日について

①日最低気温が10℃以上②日最高気温が15℃以上③降雨日とその翌日、以上の3条件が揃うと赤かび病菌の子のう胞子が飛散する好適日（以下、胞子飛散好適日）となります。過去5年間と比較して、令和6年産は最も胞子飛散好適日が多くなっています（表1、2）。

表1 令和6年産における赤かび病の胞子飛散好適日の出現状況

アメダス地点	4月											5月			
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4
古河			●	●	●	●	●				●	●	●	●	
	5月														
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
		●	●					●	●	●	●	●			

表2 令和6年産と過去5年産における赤かび病の胞子飛散好適日数(古河アメダス、4/20～5/19)

令和6年産	令和5年産	令和4年産	令和3年産	令和2年産	令和元年産
16	12	13	14	11	7

(3) 感染後の症状

感染すると穂の一部や全体が褐変します（写真1、色が変化している穂は全て感染を確認）。また、発病穂は、穎の合わせ目から桃色もしくはオレンジ色のかびが確認できます（写真2）。



写真1：古河市のゆめかおりにおける発病状況（令和6年5月16日撮影）



写真2：ゆめかおりでの発病穂の様子

(4) 感染拡大のステップ

赤かび病の感染拡大は、以下の2つのステップに分類できます。

- ①赤かび病菌の侵入（開花始期から10日間の降雨により発病穂率が高まる）
 ②侵入した菌による感染拡大（開花始期から11～20日間の降雨によりDON濃度が高まる）

現在は、**ステップ②**であるため、DON濃度低減効果のある農薬の使用が効果的です。収穫前日数に注意して、表3の農薬を使用しましょう。

表3 小麦赤かび病のDON濃度低減に有効な農薬（令和6年5月15日現在）

薬剤名	使用方法	希釈倍数 (散布液量)	使用 時期	本剤の 使用回数	有効成分 (使用回数)	FRAC コード
シルバキュア フロアブル	散布	2000倍 (60～150L/10a)	収穫 7日前 まで	2回以内	チオコゾール (3回以内。た だし、根雪前は1 回以内、融雪後 は2回以内)	3 (G1)
	散布 (ブームスプレー)	500倍 (25L/10a)				
	無人航空機 による散布	16倍 (0.8L/10a)				
ワークアップ フロアブル	散布	2000～3000倍 (60～150L/10a)	収穫 7日前 まで	3回以内	チオコゾール (3回以内)	3 (G1)
	散布 (ブームスプレー)	500～750倍 (25L/10a)				
	無人航空機 による散布	10～24倍 (0.8L/10a)				
トップジンM ゾル	散布	1000～1500倍 (60～150L/10a)	収穫 14日前 まで	3回以内 (ただし、 出穂期以 降は2回 以内)	チオファネートメチル (4回以内。 ただし、種子へ の処理は1回以 内、散布及び無 人航空機散布は 合計3回以内、 出穂期以降は2 回以内)	1 (B1)
	無人航空機 による散布	8倍 (0.8L/10a)				

農薬を使用する際は、必ず使用前にラベルを見て、対象作物、希釈倍数や散布液量、使用時期、使用回数等を確認しましょう（令和6年5月15日登録確認）。農薬散布時には風向、風速、散布位置やノズルの向き等に注意し、周辺作物に農薬が飛散（ドリフト）しないように注意しましょう。